
幸せ。

marizumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せ。

【著者名】

N Z ハード

N 3 5 3 6 E

【作者名】

m a r i n u m i

【あらすじ】

彼女は言った。「人間は、みんな幸せになれる」と。

窓より夕焼けの映える教室には、彼女と一人きりだつた。

彼女と言つても恋人という意味ではない。ただの代名詞の『彼女』だ。

「いきなり失礼かもしだいけど、きみつて無愛想だよね？」

「彼女が言つたので、僕は勿論

「失礼だな」

と返す。

彼女は頬をわざとらしく膨らませたが、僕はどうもせずただじつとしていた。

無愛想なのは分かつてゐる。そんなの昔からだ。小学生の頃も、中学生の頃も、そして高校生の今も、そのスタイルが変わつた覚えは無いし変えるつもりも無い。今までの人生に満足しているわけではないが、だからと言つてわざわざ生き方を変える必要は無いはずだ。

「でもね……そんなんだつたら、幸せが逃げちゃうよ？」

「幸せなんて、僕が捕まえるものでも無いよ。僕は目の前に現れる人生をなぞるだけだ。幸せが無くたつて、人生は過ぎていく」

人生は用意されている。あらかじめ、人間がそこを通るずっと前から、その人間ごとに敷かれてゐるレールなのだ。ありきたりな表現だが、僕の考えには丁度良い。

幸せなんてのは、そのレールが整備されてゐるかされていないかの違いだ。人間によつては、そのレールに障害物があつたり、はたまた途中で途切れていたり。それを不幸と呼ぶ。

レール上を進むだけの人間には、障害を取り除くことはできず、レールの先を埋めることも不可能だ。

「本当に無愛想だね、きみは」

「本当に失礼だね、きみは」

「でも、私は……違うと思つよ、やうこ、何て言つのかな。きみの人生論みたいのは」

「そりやあ結構。だからと言つて僕にきみの人生論を強制されるのは心外なんだけどな」

「強制はしないけど、知つておいて貰いたいんだよね。なんつーか、きみは……格好良いし?」

「僕が格好良いだけで自分の考えを押し付けるんだね」

「女の子つて結構単純だからねー。特に私は。思い立つたが吉田つても言うじやん。何かしら行動を起こしていないと、何か幸せが逃げていっちゃう感じがするの」

「またそれか。幸せは逃げない。幸せなんて初めから備わつていないんだよ」

「徹底的に意見が違うんだねー。とりあえず、私の話を聞きなさいよ」

「これ以上言つても無駄だと諦めた僕は、手近に有つた名前も知らないクラスメイトの椅子に腰掛けた。

それを見て納得したのか、彼女は満足げに頷き、僕と同じように近くの椅子に座つていた。

「幸せつてさ、初めから持つてるものだと思つよ。みんな平等に、いっぱいの幸せ

「……」

「私たちって、みんな小さかつた頃は何でも楽しかったじゃない。逆に楽しくないことが見つからなくらい、何をしてても楽しかった。それつて、きっと幸せを逃がしてなかつたんだよ。言い方は悪いかもだけど、貪欲にただ楽しさを求めていたんだね。今の、丁度きみとは正反対。きみは幸せつて人生全体を見て判断するものだと思つているんだらうけど、私は違うよ」

「……」

「幸せつて、今が楽しいことを言つんだよ」

「後先考えずに行動すれば良いって言つのか?」

僕は気付けば反論していた。彼女は横に首を振る。

「ううん。そうじゃない。後先考えられない人間なんていないもの。例外無く未来の幸せを願う。だからね、単純な解決策があるんだよ」

「今を幸せに生きながら、未来の幸せも考えるつていうやり方」

「そんな都合よく人生は進まない！ そもそも未来なんて知覚できるものじゃないんだ！ そんなので人々の人生が幸せになるのなら、世界からはとうに悲劇は滅んでいる！」

「なら、その悲劇に巻き込まれている人たちは、みんな未来の幸せを願つていないんだよ」

「それはその人たちへの侮辱か？ ずいぶんと破滅的な人格を持っているんだな」

「……きみがそこまで熱くなるとは思わなかつたな。結構な現実主義かと思つていたけど、それならヒーローの素質満点だね」

「はぐらかすなよ。まさかきみは、悲劇の渦中にいる人間に対して、なんの感情も持たないのか？」

「そうだよ？」

彼女は、自分の考えはさも間違つていなかのように言つ。

「狂つてるぞ、お前」

「そう？ 正論だと思わないかな？ 自分に何の関係も無い人の幸せなんて、自分の幸せと比べたら小さな物じやん」

「他人のことも考えない奴に、幸せになる資格は無い」

「幸せになる資格はみんな持つてるとてば。彼らはそれを活かしてないだけ。何で私が見ず知らずの人の幸せを考えなきやならないかな。自分の幸せは自分で何とかしなきやなのに」

「ひどいなお前は。人格破綻にも程がある」

「自分の幸せを考えない人は、他人の幸せなんて掴めないよ」

「……どうこうことだ？」

「自分のことを一番良く知っているのは自分だから。まず自分の幸せを掴まないことには、他人の幸せの掴み方なんて分からないの」「……」

「きみは、今、幸せなのかな？」

僕か？

应えは当然。

「不幸せだな。これでもかってほど、不幸せだ。お前みたいのと話している時点で、どんな話題であろうと最低最悪に不幸せだ」

「あはははははー！ ひどい言われようだね。でも、きみはおこがましいよ。不幸せな時点でおこがましい。人はみんな、幸せでなくちゃいけないんだよ。何できみは不幸せなんだろうね？」

「言つただろ？ お前と話しているからだ」

「違うね。きみが私と話しているだけで不幸せになると、決め付けたからじゃない？」

「じゃあ何だ。僕は自己暗示でもすればいいってのか？ お前と話すと幸せになれる、とでも？ 下らないな」

「下らない？ その意見のどこが下らないの？ 幸せになることができるのなら、自己暗示にでも何でも頼ればいい。これ以上無いくらいに簡単じゃないの」

「そんな偽りの幸せで、お前は納得できるのか？」

「できるとも。少なくとも、不幸せよつはずつとまじ。幸せなら、虚構の幸せで十分よ」

「そんな虚像はすぐに消える。その像が消えたとき、計り知れない不幸が圧し掛かるんだぞ？」

「だつたら虚像を実像に変えてしまえばいい。自分がどうなつても傷つかないよ。どんな手を使ってでも幸せを永遠にすればいい」

「そんなことできるはずが無い」

「私は今、とっても幸せ。さっきも言つたように、顔だけなら満点のきみと話をしてるんだもの。だつたらずつと話してれば私は幸せ」「僕が今、窓から飛び降りたらどうする？ 僕と話せなくなつて不幸せだ」

「そうしたら、また幸せになれる方法を考えるよ。そうだね、とりあえず家に帰つてテレビ見て幸せ、つてのも悪くないよね」

「なら早く帰つたらどうだ？ 僕と話す幸せがテレビを見る幸せで代替できるのなら、僕としてはひとつと帰つてもらいたいんだけど」

「無愛想だね」

「失礼だな」

「彼女は何が楽しいのか、大声で笑う。

きつと、笑うことが楽しいのだつ。

僕は笑わない。

「うん。田標は達成できたし、もう帰らうかな

「田標？」

「きみの人生論を滅茶苦茶にしてやるーつて田標」

「最悪だな」

「幸せでしょ？」

「不幸せだ」

彼女の目標通り、僕の人生論はもはや瓦解しているようだった。
もう形跡さえも思い出せない。

- 本当に不幸だ -

- 17 -

L

「幸せにならうよ」

友達と遊ぶことか？ 勉強でいい成績をとることか？ 親に讃められることか？ 美味しい物を食べることか？ ぐっすり眠ることか？ まさか、彼女と同じように、家に帰つてテレビを見ることか？

「幸せが分からんだったから、ために、私と付き合わない？」

は？

「て言うか、私と付き合ってください」

まさか今までのは、前フリ？ こんなに、元々、僕を、不愉快にさせた
おいで？

告白？ こんな空氣で？

ありえない。

それ以上に、こつこつ根性してやがる。

「返事は？」

勿論。

「めさん。はつきり言って、きみのことを万が一にも好
きこなれそうに無いんだ」「

彼女は、少しだけ残念そうな顔を見せた。

「え？」

それだけを呟いて。
彼女は椅子から立ち上がり、
別れの言葉も無しに、
教室から去つていった。

「あいつ……本当にいい根性してると
言いたいこと言つて、僕の心を壊して、拳句には告白？ 不愉快
だな。

それでも、彼女にとつては全てが幸せだったんだろうナビ。

彼女は幸せで、僕は不幸せ。

納得いかない。

彼女は僕にふられたのに、何で幸せなんだ？

普通、どうせ不幸になるだらうが。
畜生。

幸せになつてみたいなりやがつた。

こんな最悪な日は今日だけで十分だ。
こんな最悪な日が一度と訪れないように、僕はテレビを見よ。

(後書き)

「こんにちは、こんばんわ。
まりすみです。

突然ですが、幸せってなんでしょう。

一度は考えたことはあるのではないでしょうか?

結局、何なんでしょうね。

僕には分かりません。

だから、幸せの真理を知っている方、ぜひ教えていただきたいです。

僕は幸せになりたいですから。

では、まりすみでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3536e/>

幸せ。

2010年11月9日06時53分発行